

Nikāya における止観の研究

K. PHRAPONGSAK

I. はじめに

近代になってから、仏教における「止」*śamatha* 「観」*vipassanā* の研究は、種々の学者によってなされている^①。従来の止観の研究といえば、ほとんどが『清浄道論』をはじめとする註釈文献に依って、止観の働きや修行法などを検討したものである。それは、止観が Nikāya においては詳細に述べられておらず、『清浄道論』やパーリ註釈文献において体系化された修行法だからであろう。例を挙げれば、「禪」*jhāna* の準備過程なしに、観を修習する「純観」*suddhaviṇṇaṇa* または「乾観」*sukkhaviṇṇaṇa* という修行法が『清浄道論』他に説かれる^②。これは、はじめから「観修習」*vipassanā-bhāvanā* を修めながら、禪の過程なしに「刹那定」*khaṇika-samādhi* によって心を修習し、正しい智慧を起こして阿羅漢の境地に達するというものである。しかし、仏道修行の上で「禪」と「慧」との両者が並び修習させられるべきことは、「慧なき者に禪なく、禪なき者に慧なし^③」と説かれるので、明らかである。しかし、その場合、上記の修行法をどのように理解すべきか疑問である。

さらに、Nikāya においても止観の先後に言及する修行法が述べられる。それは、AN.2.4.17 *Paṭipadā-vagga* 170 において①「止を先行させる観を修習する」、②「観を先行させる止を修習する」、③「止観双運を修習する」^④のである。しかし、止観についての通常の理解によると、心を一つの対象に集中させるのを「止」といい、それによって正しい智慧を起こし、存在の真実の姿を観るのを「観」という。これは①に相当するが、そうすると、②と③の修行法をどのように理解すべきであろうかという疑問が起こる。従って、止観の先後をどのように理解すべきかという問題を解決しなければならない。ただし、本研究は、Nikāya を中心とする止観を研究するので、後代の文献や註釈文献などに依らず、Nikāya そのものにおいて止観の働きを多面的に考察し検討する。

II. Nikāya における止観とその記述の主旨

samatha、vipassanā という語を含む経を四ニカーヤ及び『小部』の最古層の經典^⑤において検索すれば、次のようになる。

A. Dīgha-Nikāya 『長部』 2 経			
	出典	止観に関する記述の主旨	同類型
A1	DN. 33 Saṅgīti-suttanta (DN. III. p.213)	(xxiii) 二法 --- 止 (samatha)・観 (vipassanā)	D2
A2	DN. 34 Dasuttara-suttanta (DN. III. p.273)	(ii) 修習すべき二法 --- 止・観 (iii) 充分に知るべき二法 --- 名・色 (iv) 捨断すべき二法 --- 無明・有愛 (x) 直証すべき二法 --- 明・解脱	B5, C6, D11
B. Majjhima-Nikāya 『中部』 6 経			
B1	MN. 6 Ākaṅkheyya-sutta (MN. I. p.33, 35-36)	初発心の比丘から始まり、阿羅漢の境地に達する比丘までの17項目の果報・功德は「諸々の戒を完成し、内に心寂止 (cetosamatha) を実行し、禪を無視せず、観をそなえ、諸々の空室の増益者になる」ことによってもたらす。	D19
B2	MN. 32 Mahāgosīṅga-sutta (MN. I. p.213, 216)	レーヴァタ長老は「独坐を楽しみ、独坐を喜び、内に心寂止を実行し、禪を無視せず、観をそなえ、諸々の空室の増益者になる比丘がいるので、ゴーシンガのサーラ林を輝かすことができるであろう」という意見を説いている。	D13, D14, E3
B3	MN. 43 Mahāvedalla-sutta (MN. I. p.294)	「戒・聞 (suta)・議論 (sākacchā)・止・観」によって資助される「正見」は「心解脱・慧解脱」をもたらす。	D12
B4	MN. 73 Mahāvaccagotta-sutta (MN. I. p.494)	ヴァッチャゴッタは比丘となって半月で有学の明 (vijjā) をすべて終え、さらに教えを世尊に願う。世尊はヴァッチャゴッタに「止・観」の修習を勧め、六神通を得ることを説いた。その後、ヴァッチャゴッタは修習し、三明をそなえて、阿羅漢果に到達する。	
B5	MN. 149 Mahāsaṅgīti-sutta (MN. III. p.289)	「六処を如実に知り見る者の八聖道」は、修習を満たすものとなる。八聖道を修習する者は、「四念処・四正勤・四神足・五根・五力・七覚支」も修習を満たすものとなり、「止・観」の二法の双運が起こる。	
		その修行者は、証智して充分に知るべき法である「五取蘊」を証智して充分に知る。証智して捨断すべき法である「無明・有愛」を証智して捨断する。証智して修習すべき法である「止・観」を証智して修習する。証智して直証すべき法である「明・解脱」を証智して直証する。	A2, C6, D11

B6	MN. 151 Piṇḍapātapārisuddhi-sutta (MN. III. p.297)	比丘は托鉢から戻ったとき、次のことを観察すべきである。それは「六処によって生じる貪欲・瞋恚・愚癡などの不善法」が捨断されているかどうか、「五妙欲・五蓋・五取蘊」が捨断されているかどうか、「四念処・四正勤・四神足・五根・五力・七覚支・八聖道・止観」が修習されているかどうか、「明・解脱」が直証されているかどうかである。	
C. Saṃyutta-Nikāya 『相応部』 6 経			
C1	SN.4.35.204 Kimsukā (SN. IV. p.195)	都城は、堅固な城壁と六つの入口がある。そこに智慧のある門衛は、無知な者たちを止め、知ある者を許す。四方から来た急ぎの使者二人が城主のいる所を門衛に尋ねる。そして、その急ぎの使者二人は中央の十字路にいる城主に如実な言葉を伝え、来たとおりの道に向かって歩く。 上述の比喩の意味を次のように述べる。都城とは「身体」の名前であり、六つの入口とは「六内処」の名前であり、門衛とは「念」の名前であり、急ぎの使者二人とは「止・観」の名前であり、城主とは識の名前であり、中央の十字路とは「四大種」の名前であり、如実な言葉とは「涅槃」の名前であり、来たとおりの道とは「八聖道」の名前である。	
C2	SN.4.41.6 Kāmaabhū (2) (SN. IV. p.295)	想受滅定 (saññāvedayitanirodha-samāpatti) に多くの利益になるものは止と観である。	
C3	SN.4.43.2 Samatho (SN. IV. p.360)	無為 --- 貪欲 (rāga)・瞋恚 (dosa)・愚癡 (moha) の滅尽 無為に導く道 --- 止・観	C4, C5, D3
C4	SN.4.43.12 Asaṅkhatam (1) Samatho (SN. IV. p.362)	無為 --- 貪欲・瞋恚・愚癡の滅尽 無為に導く道 --- 止	C3, C5, D3
C5	SN.4.43.12 Asaṅkhatam (2) Vipassanā (SN. IV. p.362)	無為 --- 貪欲・瞋恚・愚癡の滅尽 無為に導く道 --- 観	C3, C4, D3
C6	SN.5.45.159 Āgantukā (SN. V. p.52)	四方からの人々は誰でも客舎に到着すれば、この客舎に泊まる。これと同様に、誰でも「八聖道」を修習して、繰り返し行うならば、証智して充分に知るべき法である「五取蘊」を証智して充分に知る。証智して捨断すべき法である「無明・有愛」を証智して捨断する。証智して直証すべき法である「明・解脱」を証智して直証する。証智して修習すべき法である「止・観」を証智して修習する。	A2, B5, D11
D. Aṅguttara-Nikāya 『増支部』 19 経			
D1	AN.1.2.3 Bāla-vagga 10 (AN. I. p.61)	「止」を修習すれば、心が修習される。心が修習されれば、貪欲が捨断される。貪欲が捨断される心は「心解脱」という。 一方、「観」を修習すれば、慧が修習される。慧が修習されれば、無明が捨断される。無明が捨断される慧は「慧解脱」という。	

D2	AN.1.2.15 Samāpatti-vagga 10 (AN. I. p.95)	二法 --- 止・観	A1
D3	AN.1.2.17 Atthavasa-vagga 3-5 (AN. I. p.100)	貪欲 (rāga)・瞋恚 (dosa)・愚癡 (moha) 忿怒 (kodha)・怨恨 (upanāha)・偽善 (makkha)・惱害 (paḷāsa)・嫉妬 (issā)・慳惜 (macchariya)・誑惑 (māyā)・諂曲 (sātheyya)・頑迷 (thambha)・激情 (sārambha)・慢心 (māna)・過慢 (atimāna)・憍慢 (mada)・放逸 (pamāda)の証智・遍知・遍尽・捨斷・滅尽・衰減・離貪・滅・棄捨・捨離の為に「止・観」を修習すべきである。	C3, C4, C5
D4	AN.2.4.2 Cara-vagga 12 (AN. II. p.15)	何時も念を持って心寂止に導くことを学び、法蘊 (dhammakhandha) の生滅を観察する比丘を勇気のある者と呼ぶ。	
D5	AN.2.4.10 Asura-vagga 92 (AN. II. p.92)	四者 --- (1) 心寂止を得たが、増上慧法観 (adhipaṇṇādharmavipassanā) を得ない者 (2) 増上慧法観を得たが、心寂止を得ない者 (3) 心寂止と増上慧法観を得ない者 (4) 心寂止と増上慧法観を得た者	D6, D7, D18
D6	AN.2.4.10 Asura-vagga 93 (AN. II. pp.92-93)	四者 --- (1) 心寂止を得たが、増上慧法観を得ない者は「増上慧法観を齎すために修行すべき」(2) 増上慧法観を得たが、心寂止を得ない者は「心寂止を齎すために修行すべき」(3) 心寂止と増上慧法観を得ない者は「心寂止と増上慧法観を齎すために修行すべき」(4) 心寂止と増上慧法観を得た者は「煩惱の滅尽のために心寂止と増上慧法観をさらに修行すべき」	D5, D7, D18
D7	AN.2.4.10 Asura-vagga 94 (AN. II. pp.93-95)	四者 --- (1) 心寂止を得たが、増上慧法観を得ない者は「増上慧法観を得た者に尋ねるべき」(2) 増上慧法観を得たが、心寂止を得ない者は「心寂止を得た者に尋ねるべき」(3) 心寂止と増上慧法観を得ない者は「心寂止と増上慧法観を得た者に尋ねるべき」(4) 心寂止と増上慧法観を得た者は「煩惱の滅尽のために心寂止と増上慧法観をさらに修行すべき」	D5, D6, D18
D8	AN.2.4.15 Abhā-vagga 146 (AN. II. p.140)	四時 --- (1) 応時の聴法 (kālena dhammasavanam) (2) 応時の法談 (kālena dhammasākacchā) (3) 応時の止 (kālena samatho) (4) 応時の観 (kālena vipassanā)	D9
D9	AN.2.4.15 Abhā-vagga 147 (AN. II. p.140)	四時 --- (1) 応時の聴法 (2) 応時の法談 (3) 応時の止 (4) 応時の観 四時を正しく修習すれば、煩惱の滅尽に達する。それは、降雨が谷川乃至海洋を完成させることと比喩するのである。	D8

D10	AN.2.4.17 Paṭipadā-vagga 170 (AN. II. p.157)	阿羅漢に得達する四支分 --- (1) 止を先行させる観を修習する (2) 観を先行させる止を修習する (3) 止と観とを共に修習する (止観双運) (4) 心が法掉挙を離れ一点になり統一する	
D11	AN.2.4.26 Abhiññā-vagga 251 (AN. II. p.247)	充分に知るべき法 --- 五取蘊 捨断すべき法 --- 無明・有愛 修習すべき法 --- 止・観 直証すべき法 --- 明・解脱	A2, B5, C6
D12	AN.3.5.3 Pañcaṅgika-vagga 25 (AN. III. p.21)	「戒・聞・議論・止・観」によって資助される「正見」は「心解脱・慧解脱」をもたらす。	B3
D13	AN.3.5.8 Yodhājīva-vagga 73 (AN. III. pp.86-87)	「法を学得して、日を過ごさず、独坐を捨てず、内に心寂止を実行する」ならば、法に確立するものという。	B2, D14, E3
D14	AN.3.5.9 Thera-vagga 90 (AN. III. pp.116-118)	有学比丘に退転させないことにおいて終始一貫して変わらないことは、「独坐を捨てず、内に心寂止を実行すること」である。	B2, D13, E3
D15	AN.3.6.5 Dhammika-vagga 54 (AN. III. p.373)	五根 --- 信・念・精進・止・観	
D16	AN.3.6.11 Tika-vagga 116 (AN. III. p.449)	三法 --- 掉挙 (uddhacca)・不護 (asaṃvara)・放逸 三法を捨断する修習法 --- 止・防護・不放逸	
D17	AN.4.9.1 Sambhoga-vagga 4 Nandaka (AN. IV. p.360)	世尊はナンダカ比丘に「信・戒・心寂止・増上慧法観」を完成させるべきことを説いた。	
D18	AN.5.10.6 Sacitta-vagga 54 Samatha (AN. V. pp.99-100)	世尊は「自心において善く知るものになる」ことを比丘たちに説いた。内容は「心寂止」と「増上慧法観」を説く。	D5, D6, D7
D19	AN.5.10.8 Ākaṅkha-vagga 71 Ākaṅkha (AN. V. p.131, 133)	初発心の比丘から始まって、阿羅漢の境地に到達する比丘までの果報・功德は「諸々の戒を完成し、内に心寂止を実行し、禪を無視せず、観をそなえ、諸々の空室の増益者になる」ことによって齎される。	B1
E. Khuddaka-Nikāya 『小部』の最古層10経			
E1	Dhp.7 Arahanta-vagga 94 (Dhp.94)	御者によって善く訓練された馬のように、諸根 (感官) が止に到達し、慢心を捨断して無漏である。そのような者を神々さえも羨望する。	
E2	It.2.1 Paṭhama-vagga 37 Saṃvejaṇīya (It. 37)	熱心に住し、寂靜の生活を送り、掉挙にならず、心寂止を実行する者は苦の滅尽に到達すべきである。	
E3	It.2.2 Duttiya-vagga 45 Sallānaṃ (It. 45)	「独坐を楽しみ、独坐を喜び、内に心寂止を実行し、禪を無視せず、観をそなえ、諸々の空室の増益者に住すること」により二つの果報 (阿羅漢果と不還果) のうちいずれかの果報を期待すべきである。	B2, D13, D14

E4	It.4.1 Paṭhama-vagga 111 Sampanna (It. 111)	世尊が比丘たちに「精進と懺悔をする者が勇気のある者である」ことについて説いた。そして、最後に「何時も念を持って心寂止に導くことを学び、法蘊の生滅を観察する比丘を勇気のある者と呼ぶ」と説いた。	D4
E5	Sn.1 Uruga-vagga 3 Khaggavisāṇa-sutta (Sn. 67)	以前に経験した楽しみと苦しみを、また喜びと憂いを捨て、清らかな捨 (upekkhā) と止を得て、犀の角のようにただ独り歩むべきである。	
E6	Thag.1.12 Dvādasama-vaggo Vacchagotto thero (Thag. 112)	私 (ヴァッチャゴッタ長老) は三明をそなえ、偉大な禪家であり、心寂止を熟知している。私は自己の利益を達成し、ブッダの教えをなしとげた。	
E7	Thag.10 Dasa-nipāta Upasena Vaṅgantaputto thero (Thag. 584)	比丘が相をよく把握し、心の生起を熟知する。適当な時に止と観を実行すべきである。	
E8	Thag.17 Timsa-nipāta Sāriputto thero (Thag. 988)	博識であり、智慧であり、諸々の戒によく専心し、また心寂止を実行する者は私 (サーリプッタ長老) の頭上に立て。	
E9	Thag.18 Cattālisa-nipāta Mahākassapa thero (Thag. 1077)	智慧であり、如実を語り、諸々の戒によく専心し、心寂止を具現している者を智慧ある人々は賞讃する。	
E10	Thīg.5 Pañca-nipāta Santike aññaṃ byākamsu (Thīg. 119)	彼女たち (三十人の長老尼) は、パターチャラーの教えの言葉を聞いて、両足を洗い、一方に近づいた。心寂止を実行し、ブッダの教えをなしとげた。初夜において前世を随念した。中夜において天眼を淨めた。後夜において〔無明〕の闇冥を破壊した。	

以上、Nikāya で止観が語られる場合、samatha、cetosamatha、vipassanā、adhipaññādharmavipassanā の四つの語が挙げられ、以下のように分類される。

1. samatha が単独で用いられる場合、
 - 1.1 samatha が単独で用いられる場合、4 回 (C4, D16, E1, E5)
 - 1.2 cetosamatha が単独で用いられる場合、9 回 (D4, D13, D14, E2, E4, E6, E8, E9, E10)
2. vipassanā が単独に語られる場合、1 回 (C5)
3. samatha-vipassanā が併記される場合、
 - 3.1 samatha-vipassanā が併記される場合、20 回 (A1, A2, B3, B4, B5, B6, C1, C2, C3, C6, D1, D2, D3, D8, D9, D10, D11, D12, D15, E7)
 - 3.2 cetosamatha-vipassanā が併記される場合、4 回 (B1, B2, D19, E3)
 - 3.3 cetosamatha-adhipaññādharmavipassanā が併記される場合、5 回 (D5, D6, D7, D17, D18)

このように、Nikāya においては samatha-vipassanā の併記される場合が最多である。samatha が単独に語られる場合がその次であり、vipassanā が単独に語られる場合は一ヶ所しかない。しかし、Gyana Ratna Thera 氏が Chatṭha Saṅgāyana CD-Rom により註釈及び副註釈において samatha と vipassanā を検索し、作成した表によると後代の文献では、併記される samatha-vipassanā より単独に語られる vipassanā の方が多い^⑥。

次に、Nikāya における止観の働きを理解する為、先に挙げた Nikāya の経文（一部）を以下のように主題によって分類し、第Ⅳ節以降で同じ階層の經典において関連する他の経文と比較検討する。

I. 八聖道に関するもの。

①「戒・聞・議論・止・観」によって資助される「正見」は「心解脱・慧解脱」をもたらすというもの (B3, D12)。

②「六処を如実に知り見る者の八聖道」は修習の円満に至る。「八聖道」を修習する者は、「四念処・四正勤・四神足・五根・五力・七覚支」も修習の円満に至り、「止・観」の二法の双運が起こる。その修行者は、証智して充分に知るべき法を充分に知り、捨断すべき法を捨断し、直証すべき法を直証し、修習すべき法を修習するというもの (B5, C6)。

II. 止観修習の先後に関するもの (D5, D6, D7, D10, D18)。

III. 心解脱・慧解脱に関するもの。

①「戒・聞・議論・止・観」によって資助される「正見」は「心解脱・慧解脱」をもたらすというもの (B3, D12)。

②「止」を修習すれば、「心」が修習される。心が修習されれば、「貪欲」が捨断される。貪欲が捨断される心は「心解脱」という。一方「観」を修習すれば、「慧」が修習される。慧が修習されれば、「無明」が捨断される。無明が捨断される慧は「慧解脱」というもの (D1)。

IV. 充分に知るべき、捨断すべき、直証すべき、修習すべき法に関するもの (A2, B5, C6, D11)。

ただし、本稿はⅠの八聖道に関するもの及びⅡの止観修習の先後に関するもののみと比較して検討する。

III. Nikāya における止観の用例と意味

止観の定義は、Nikāya 時代において明らかに説かれていないが、経と論との中間時代には説かれて^⑦いる。それ故に、止観の働きを検討する前に、Nikāya 時代における止観の用例と意味を調査しておきたい。

samatha には大きく分けて三つの用例が存在する^⑧。まずは vipassanā と対比して用いられ

る場合である。^⑨二つ目は、adhikaraṇasamatha として用いられ、諍いを静め滅することである。^⑩そして、三つ目は sabbasaṅkhārasamatha として用いられ、煩惱を滅した状態をいう場合であり、一般的には涅槃・悟りの境地を意味し、定型句として何度か登場している。^⑪

ここでは、adhikaraṇasamatha と sabbasaṅkhārasamatha として用いられる場合に触れず、vipassanā と対比して用いられる samatha の用例と意味を検討する。

まず、Nikāya においては次のように把握されている。

Dve 'me bhikkhave dhammā vijjābhāgiyā.

Katame dve ?

Samatho ca vipassanā ca. Samatho ca bhikkhave bhāvito kam attham anubhoti ? Cittaṃ bhāvīyati. Cittaṃ bhāvitam kam attham anubhoti ? Yo rāgo so pahīyati.

Vipassanā bhikkhave bhāvitā kam attham anubhoti ? Paññā bhāvīyati. Paññā bhāvitā kam attham anubhoti ? Yā avijjā sā pahīyati : (D1)

比丘たちよ、これらの二つの法は明に導くものである。

二つとは何であるか。

止と観とである。比丘たちよ、止が修習されたならば、いかなる利益を受けるであろうか。心が修習されるのである。心が修習されたならば、いかなる利益を受けるであろうか。すべての貪欲が捨断されるのである。

比丘たちよ、観が修習されたならば、いかなる利益を受けるであろうか。慧が修習されるのである。慧が修習されたならば、いかなる利益を受けるであろうか。すべての無明が捨断されるのである。

Sace pana bhikkhave bhikkhu paccavekkhamāno evaṃ jānāti : lābhi 'mhi ajjhataṃ cetosamathassa, lābhī adhipaññādharmavipassanāyā ti, tena bhikkhave bhikkhunā tesu yeva kusalesu dhammesu patitṭhāya uttarim āsavānaṃ khayāya yogo karaṇīyo. (D18)^⑫

比丘たちよ、もし比丘が観察して次のように知るとしよう。「[私は] 内に心寂止を得た。増上慧法観を得た」と。比丘たちよ、その比丘はそれらの善法（心寂止と増上慧法観）において確立し、さらに煩惱の滅尽のために修行すべきである。

と。即ち、「止」とは心を修習することであり、「観」とは慧を修習することであり、「止」を修習すれば、貪欲が捨断され、「観」を修習すれば、無明が捨断されるところなのである。

従って、「止」は戒・定・慧の三学でいえば定、即ち増上心学 (adhicitta-sikkhā) に相当する。これに対して、「観」は慧、即ち増上慧学 (adhipaññā-sikkhā) に相当すると考えられる。前述のように、「止」は心を修習し、「観」は慧を修習するものだからである。

そして「止」は心が一つの対象に集中されて不動となることである。また、

Uddhaccassa pahānāya samatho bhāvetabbo, asaṃvarassa pahānāya saṃvaro bhāvetabbo, pamāḍassa pahānāya appamādo bhāvetabbo. (D16)

掉挙の捨断の為に止を修習すべきである。不護の捨断の為に防護を修習すべきである。放逸の捨断の為に不放逸を修習すべきである。

Evam viharī ātāpī
santavutti anuddhato |
cetosamatham-anuyutto
khayaṃ dukkhassa pāpuṇe ti || (E2)

このように、熱心に住し、寂静の生活を送り、掉挙にならず、心寂止を実行する者は苦の滅尽に到達すべきである。

とされるように、掉挙 (uddhacca) 即ち心の浮つきを静める為のものである。要するに定、即ち増上心学に相当する。さらに、D15においては「信・念・精進・止・観」の五根が言及される。通常の五根、即ち「信・精進・念・定・慧」と比較すると「止」は定に当り、「観」は慧に相当する。

以上のように、Nikāya 時代における「止」は「定」、即ち「増上心学」に相当する。これに対して、「観」は定と密接不離である「慧」、即ち「増上慧学」に相当すると考えられる。従って、次節はこの止観の用例に基づいて関連事項を考察して検討する。¹³

IV. Nikāya における止観の先後問題

仏道修行の上で定と慧との両者が並び修習させられるべきことは、

n' atthi jhānaṃ apaññassa paññā n' atthi ajhāyato,
yamhi jhānañ ca paññā ca sa ve nibbānasantike. (Dhp. 372)

慧なき者に禅なく、禅なき者に慧なし。

慧と禅とをそなえた者は、涅槃の近くにある。

といわれるとおりである。前節に説いた「止」は定、即ち増上心学に相当し、^⑭「観」は慧、即ち増上慧学に相当するので、「観なき者は止なく、止なき者に観なし」ともいえる。また、

Puna ca param āvuso bhikkhu samathavipassanaṃ yuganaddhaṃ bhāveti, tassa samathavipassanaṃ yuganaddhaṃ bhāvayato maggo sañjāyati. So taṃ maggaṃ āsevati bahulīkaroti. Tassa taṃ maggaṃ āsevato bahulīkaroto saññojanāni pahīyanti anusayā vyantihonti. (D10)

友よ、さらにまた比丘は止と観とを共に（止観双運）修習する。彼が止と観とを共に修習すれば、道が生じる。彼はその道を実修し、……多修する。彼はその道を実修し、……多修すれば、諸々の結が捨断され、諸々の随眠がなくなる。

と「止観双運」が説かれると同時に、止と観に先後関係も説かれている。即ち、

Idha āvuso bhikkhū^⑮ samathapubbaṅgamaṃ vipassanaṃ bhāveti, tassa samatha-pubbaṅgamaṃ vipassanaṃ bhāvayato maggo sañjāyati. So taṃ maggaṃ āsevati bhāveti bahulīkaroti. Tassa taṃ maggaṃ āsevato bhāvayato bahulīkaroto saññojanāni pahīyanti anusayā vyantihonti.

Puna ca param āvuso bhikkhu vipassanāpubbaṅgamaṃ samathaṃ bhāveti, tassa vipassanāpubbaṅgamaṃ samathaṃ bhāvayato maggo sañjāyati. So taṃ maggaṃ āsevati bhāveti, bahulīkaroti. Tassa taṃ maggaṃ āsevato bahulīkaroto saññojanāni pahīyanti anusayā vyantihonti. (D10)

友よ、ここに比丘は止を先行させる観を修習する。彼が止を先行させる観を修習すれば、道が生じる。彼はその道を実修し、修習し、多修する。彼はその道を実修し、修習し、多修すれば、諸々の結が捨断され、諸々の随眠がなくなる。

友よ、さらにまた比丘は観を先行させる止を修習する。彼が観を先行させる止を修習すれば、道が生じる。彼はその道を実修し、修習し、多修する。彼はその道を実修し、修習し、多修すれば、諸々の結が捨断され、諸々の随眠がなくなる。

また、観を伴われない止や止を伴われない観も説かれている。

Idha bhikkhave ekacco puggalo lābhī hoti ajjhattaṃ cetosamathassa na lābhī adhipaññādharmavipassanāya, idha pana bhikkhave ekacco puggalo lābhī adhipañ-

ñādhāmmavipassanāya na lābhī ajjhataṃ cetosamathassa, (D5)^⑬

比丘たちよ、この世においてある者は内に心寂止を得たが、増上慧法観を得ない。比丘たちよ、またこの世においてある者は増上慧法観を得たが、内に心寂止を得ない。……

これは、止と観との働きや性格が異なるからであろう。止観に先後・順序がなければならないかどうかは、Nikāya 時代において詳しく説かれていない^⑭。ただし、B5では、六処を如実に知り見る者の八聖道は修習の円満に至り、この八聖道を修習する者は、

cattāro pi satipaṭṭhānā bhāvanāpāripūriṃ gacchanti, cattāro pi sammappadhānā bhāvanāpāripūriṃ gacchanti, cattāro pi iddhipādā bhāvanāpāripūriṃ gacchanti, pañca pi indriyāni bhāvanāpāripūriṃ gacchanti, pañca pi balāni bhāvanāpāripūriṃ gacchanti, satta pi bojjhaṅgā bhāvanāpāripūriṃ gacchanti. Tass' ime dve dhammā yuganandhā vattanti, samatho ca vipassanā ca. (B5)

四念処も修習の円満に至る。四正勤も修習の円満に至る。四神足も修習の円満に至る。五根も修習の円満に至る。五力も修習の円満に至る。七覚支も修習の円満に至る。彼にこれらの二つの法の双運が起こる。〔それは〕止と観とである。

と述べている。ここで六処を如実に知り見る者の八聖道は修習の円満に至り、そしてこの八聖道を修習する者は、止観双運が起こるので、八聖道と止観にはつながりがあることが分かる。従って、止と観のうちどちらが先行してもいいのか、それとも先後・順序がしなければならないのか、という疑問を解決するために、Nikāya における八聖道の記述を検討する。

V. 有漏と聖・無漏との八聖道と止観

Nikāya において八聖道を解釈するときは、一般に八支の一々を列挙し、それぞれの内容を説くという形をとる^⑮。このような解釈の方法では八支がどのように修習されるかは必ずしも明確でない。八聖道の八支の修習については MN.117 Mahācattārisaka-sutta 「大四十経」^⑯において説かれている。

「大四十経」においては、八支のうちの正定が中心の修行であり、他の七支は正定の補助具とされる^⑰。正見は、各支の邪道と正道を正しく認知するために先行すると説かれている。そして、邪道と正道の内容が述べられており、正見・正思惟・正語・正業・正命がそれぞれ有漏 (sāsava) と聖・無漏 (ariya・anāsava) とに分けられている。各支の邪道を断除し、正道を具足するために、正見・正精進・正念が常に各支の修習に随従し、随転するといわれる。

正見とは何であるかについては、次のように述べられている。

Katamā ca, bhikkhave, sammādiṭṭhi ? Sammādiṭṭhiṃ p' ahaṃ, bhikkhave, dvayaṃ vadāmi. Atthi, bhikkhave, sammādiṭṭhi sāsavā puññābhāgiyā upadhivepakkā ; atthi, bhikkhave, sammādiṭṭhi ariyā anāsavā lokuttarā maggaṅgā. Katamā ca, bhikkhave, sammādiṭṭhi sāsavā puññābhāgiyā upadhivepakkā ? Atthi dinnam, atthi yittham, atthi hutam, atthi sukaṭadukkaṭānam kammānam phalam vipāko, atthi ayam loko, atthi paro loko, atthi mātā, atthi pitā, atthi sattā opapātikā, atthi loka samaṇabrāhmaṇā sammaggatā sammāpaṭipannā ye imaṃ ca lokam paraṃ ca lokam sayam abhiññā sacchikatvā pavedentī ; ayam, bhikkhave, sammādiṭṭhi sāsavā puññābhāgiyā upadhivepakkā.

Katamā ca, bhikkhave, sammādiṭṭhi ariyā anāsavā lokuttarā maggaṅgā ?

Yā kho, bhikkhave, ariyacittassa anāsavacittassa ariyamaggasa samaṅgino ariyamaggaṃ bhāvayato paññā paññindriyaṃ paññābalaṃ dhammavicayasambojjhaṅgo sammādiṭṭhi maggaṅgā, —ayam, bhikkhave, sammādiṭṭhi ariyā anāsavā lokuttarā maggaṅgā. (MN. vol.III. p.72)

比丘たちよ、正見とは何であるか。比丘たちよ、私は正見を二種であると語る。比丘たちよ、即ち有漏にして、福德を分有し、依果をもたらず正見と、聖・無漏・出世間にして、道支である正見とである。比丘たちよ、有漏にして、福德を分有し、依果をもたらず正見とは何であるか。布施あり、祭祀あり、供儀あり、善悪業の果報あり、此世あり、他世あり、母あり、父あり、化生の有情あり、沙門バラモンにして正行正習、自ら此世他世を通達し証知し宣説する者が世に在り、と主張する。比丘たちよ、これが有漏にして、福德を分有し、依果をもたらず正見である。

比丘たちよ、聖・無漏・出世間にして、道支である正見とは何であるか。

比丘たちよ、聖心・無漏心・聖道を完備し、聖道を修習している者には、慧・慧根・慧力・摂法覚支・道支である正見がある。比丘たちよ、これが聖・無漏・出世間にして、道支である正見と言われる。

有漏の正見の内容は、此世他世があり、業の果報、世間において等正覚者がいるなどと主張することであるといわれる。これらのことを認めなければ、修行は始まらないであろう。この意味で有漏の正見は修行の動機であるとも言える。

聖・無漏の正見の内容については慧・慧根・慧力・摂法覚支とされるに留まり、詳しいこと

は言われていないが、他の經典において慧根と慧力とは、四聖諦を知ることを指す^{②①}。択法覺支については「慧をもってこの法を考察し、伺察して思量に至る」と述べられているが、ここでいう法もまた法の本質つまり無常・苦・無我あるいは四聖諦・十二支縁起であると考えられ、そして慧については解釈が多様であるが、ここでは正見の内容であるので、四聖諦・十二支縁起・五蘊・十二処・十八界を如実に知ることと理解するのが適切である。「大四十經」以外の經典に述べられる正見は、四聖諦・十二支縁起・五蘊・十二処・十八界を如実に知ること^{②②}を指している。これは、聖・無漏の正見の内容と一致しており、通常は正見とは有漏の正見ではなく、聖・無漏の正見を指すことがわかる^{②③}。

ところで、B5により「六処を如実に知り見る」ことは八聖道の正見に相当し、さらにこの正見は、上述のように有漏の正見でなく聖・無漏の正見に相当するのである。それ故に、この八聖道は聖・無漏の八聖道となるので、四念処・四正勤・四神足・五根・五力・七覺支・止觀も聖・無漏の段階であると考えられる。従って、止觀も有漏と聖・無漏とに分けられることがわかる。

VI. 八聖道に基づく止觀の働き

次に、八聖道を修行段階として検討するならば、正見は、なぜ八聖道の第一支である正見が同時に四聖諦全体を如実に知ることができるのかという疑問が起こる。宇井伯寿氏及び中村元氏は「循環論」と評し^{②④}、和辻哲郎氏は「矛盾」と述べるが、三枝充恵氏は彼らを批判し、「正見とは四諦の自己反省・自己認識・自覚である」とみなしている^{②⑤}。

四聖諦を如実に知るということは、単に四聖諦の一々を知るに止まらず、四聖諦の一々を知る上に、四聖諦の一々に対してやるべきこと、そしてやるべきことを既にやったことを知ること^{②⑥}とも必ず伴う。苦滅道聖諦の場合について言えば、「これは苦滅道聖諦であり、この苦滅道聖諦は修習すべきであり、この苦滅道聖諦は修習された」ということを如実に知ることである^{②⑦}。これは、八聖道全体を修習し終えたことを意味するのであるから、残りの七道支をまだ修習していないのに、正見だけを修習して、なぜ八聖道全体を修習し終えたということになるであろうか。これは、Thanavuddho氏が「螺旋論」と述べる^{②⑧}。

八聖道を修行の段階として考える時には、八聖道は有漏の八聖道と聖・無漏の八聖道とに分けられる。有漏の正見は、業の果報ということと世間に等正覚者がいることなどを信ずることを意味する。それは修行の動機であり、また邪道と正道を見分けるために必要不可欠であるが、四聖諦の智を意味するわけではない。この有漏の正見をもって修行を始める。邪思惟・邪語・邪業・邪命を離れ、精進・念をもって正しい生き方を営む。清らかな生活が完成し、追悔(vipatti-sāra)すること^{②⑨}もなくなる。また、精進・念をもって瞑想に入り、次第に四禪を修習

し、深く瞑想状態に入りつつある時に、慧が生じて、定と慧が相互に影響し合って増大しながら、煩惱が徐々に断除され、ある境地に達し、四聖諦の智が起こり、十結 (dasa samyojana) の中の有身見・疑惑・戒禁取が完全に断除されれば、その者は八聖道を一段階修習し終えて預流者となる^⑫。この時、八聖道は聖・無漏の八聖道となる。四聖諦・五蘊・六処などを如実に知ることがこの聖・無漏の正見の解釈である。経典に説かれる八聖道は一般にこの聖・無漏の八聖道を意味する。このように繰り返し修習し、漏・煩惱が完全に断除されれば、阿羅漢の境地に達する。即ち、預流者と同じく最初の三結を捨断し、貪欲・瞋恚・愚癡が預流者よりも少なくなつて一來者となる。十結の中の五下分結を捨断して不還者となる。十結及び全ての漏・煩惱を捨断して、阿羅漢となるのである^⑬。

以上、まとめていえば、(a) 有漏の正見をもって修行を始め、清らかな生活が完成し、追悔することもなくなる。精進・念をもって瞑想に入り、次第に四禪を修習する (有漏の正見→有漏の正定)。そして、(b) 深く瞑想状態に入りつつある時に、ある境地に到達し、四聖諦の智が起こる (有漏の正定→聖・無漏の正見)。(c) この時、八聖道は聖・無漏の八聖道となり、有身見・疑惑・戒禁取が完全に断除されれば、その者は八聖道を一段階修習し終えて預流者となる (聖・無漏の八聖道)。このように繰り返し修習し、漏・煩惱が完全に断除されれば、阿羅漢の境地に達する。

従つて、D10において「止を先行させる観を修習する」のは (b) の段階に相当する。即ち、まず修行者が「止」を修習し、次第に四禪に入る。そして、深く瞑想状態に入りつつある時に、ある境地に達し、四聖諦・五蘊・十二処などを如実に知る「観」が起こるのである (有漏の止→聖・無漏の観)。

「観を先行させる止を修習する」のは (a) の段階に相当すると考えられる。それは、修行者が業の果報ということと世間に等正覚者がいることなどを観察し、あるいは四聖諦・十二支縁起・五蘊・十二処・十八界を観察・洞察するといえども、これは修慧 (bhāvanā-maya-paṇṇā) によって四聖諦などを如実に知るではなく、思慧 (cintā-maya-paṇṇā) によって四聖諦などを理解することであるから、「聖・無漏の観」ではなく、「有漏の観」だけである。そして、この観をもって修行を始め、止を修習し、次第に四禪に入るのである (有漏の観→有漏の止)。

さらに、もう一つの根拠として四聖諦の智により漏・煩惱を捨断する聖・無漏の観の段階に入る前に、少なくとも初禪 (paṭhama-jhāna) の段階に到達したのであることが AN.4.9.4 Mahā-vagga 36 Jhāna において述べられ、次のようになる。

Paṭhamam p' ahaṃ bhikkhave jhānaṃ nissāya āsavānaṃ khayaṃ vadāmi,
dutiyaṃ p' ahaṃ bhikkhave jhānaṃ tatiyaṃ catutthaṃ ākāsaṇa-

cāyatanam viññā-ṇaṇcāyatanam ākiñcaññāyatanam nevasaññānā-saññāyatanam p' ahaṃ bhikkhave jhānaṃ nissāya āsavānaṃ khayam vadāmi. (AN. vol.IV. p.422)

比丘たちよ、私は初禪に依りて諸々の煩惱の滅尽を説く。比丘たちよ、私は第二禪……第三禪……第四禪……空無辺処……識無辺処……無所有処……非想非非想処に依りて諸々の煩惱の滅尽を説く。

上述のように、聖・無漏の觀の段階に入る前に四禪・無色定、即ち少なくとも初禪の段階に到達しなければならないのであることが明らかになった。

それ故に、止を修習する前に聖・無漏の觀を修習すること、あるいは、止を得る前に聖・無漏の觀を得たことは不合理であると考えられるので、この場合は「聖・無漏の觀」ではなく、「有漏の觀」に相当すると考えられるであろう。

「止と觀とを共に（止觀双運）修習する」のは（c）の段階に相当すると考えられ、即ち、四聖諦の智が起こる時に、聖心・無漏心・聖道を完備し、止と觀とを共に（止觀双運）修習し、有身見・疑惑・戒禁取が完全に断除されれば、その者は八聖道を一段階修習し終えて預流者となる（聖・無漏の止觀双運）。このように繰り返し修習し、漏・煩惱が完全に断除されれば、阿羅漢の境地に達するのである。

そして、以上と同様にD5、D6、D7、D18において「内に心寂止を得たが、増上慧法觀を得ない」のは（b）の段階に相当し、「増上慧法觀を得たが、内に心寂止を得ない」のは（a）の段階に相当するであろう。それは、前述のように初次の道諦である正見といえども、残りの七道支をまだ修習していないのに、正見だけを修習して、八聖道全体を修習し終えたということは有り得ないので、「増上慧法觀を得たが、内に心寂止を得ない」のは「聖・無漏の觀」を意味するわけではなく「有漏の觀」であろう。そしてD6、D7、D18の最後において「比丘たちよ、その比丘はそれらの善法（心寂止・増上慧法觀）において住し、さらに煩惱の滅尽のために修行すべきである」と述べられ、これは（c）の「聖・無漏の止觀双運」の段階に相当するであろう。

ここで着目したいのは、有漏の「觀」から始まり「止」を修習すること、「止」のみを修習して苦の滅尽に到達すること（E2）や無明の闇冥を破壊すること（E10）、あるいは法掉挙^③により捕まえられた心が「止」によって捨断され、一点になり統一すること（D10）である。これは聖・無漏の「觀」を修習せずに「止」のみを修習することによって漏・煩惱を捨断できるという意味ではなく、ただ「定」または「止」を中心として修行法を省略して説いただけであろう。

VII. まとめ

① 初期經典としての Nikāya においては「止・観」の併記される場合が最多である。「止」が単独に語られる場合はその次である。「観」が単独に語られる場合は一ヶ所しかない。しかし、後代の文献や註釈文献などは、併記される「止・観」より単独に語られる「観」の方が多い。

② Nikāya における止観の定義について、「止」は定、即ち増上心学に相当する。これに対して、「観」は定と密接不離である増上慧学に相当すると考えられる。

③ 止観は、八聖道と同様に「有漏」と「聖・無漏」との段階に分けられる。

④ 止観の働きの先後問題に対して「観を先行させる止を修習する」のは、業の果報ということと世間に等正覚者がいることなどを観察し、あるいは四聖諦・十二支縁起・五蘊・十二処・十八界を観察・洞察するといえども、これは「修慧」によって四聖諦などを如実に了知するのではなく、「思慧」によって四聖諦などを理解することであるから、聖・無漏の観ではなく、有漏の観だけである。そして、この観をもって修行を始め、止を修習し、次第に四禅に入るのである（有漏の観→有漏の止）。

⑤ 「止を先行させる観を修習する」のは、まず「止」を修習し、次第に四禅に入る。そして、深く瞑想状態に入りつつある時に、ある境地に達し、四聖諦の智、五蘊・十二処などを如実に了知する「観」が起こるのである（有漏の止→聖・無漏の観）。

⑥ 「止と観とを共に修習する」のは、四聖諦の智が起こる時に、聖心・無漏心・聖道を完備し、止と観とを共に修習し、有身見・疑惑・戒禁取が完全に断除されれば、その者は八聖道を一段階修習し終えて預流者となる。このように繰り返し修習し、漏・煩惱が完全に断除されれば、阿羅漢の境地に達するのである（聖・無漏の止観双運）。

⑦ 「禅」の過程なしに、ただ観のみを修習する「純観」または「乾観」という修行法は、Nikāya において出ない。Nikāya の立場から見れば、必ず「禅」に入らねばならないのである。

以上、Nikāya における止観と八聖道との関連を検討し、以上の結論に達したが、Nikāya における止観の働きを理解するために、八聖道をはじめとする修行道のみならず、心解脱・慧解脱に関連するものや四聖諦の三転十二行相などと多面的に考察し比較するのが必要なので、それは今後の課題にしておきたい。

註

① 光地英学氏は「止と観について」の主題のもとに大乘起信論や瑜伽師地論などの漢訳仏典を中

心に文献的な調査を行っている(光地英学 [1973] 「止と観について」『印度学仏教学研究』42 (21-2) 東京: 日本印度学仏教学会, pp.106-110)。関口真大氏は様々な分野での止観の研究論文を編集して『止観の研究』として刊行した(関口真大 [1975] 『止観の研究』東京: 岩波書店)。その中で、Nikāya・阿含及び Abhidhamma に関するものは、中村元氏の「原始仏教における止観」(pp.35-49)、平川彰氏の「律蔵に現れた禅の実践」(pp.51-71)と佐藤密雄氏の「清浄道論に於ける止観」(pp.113-138)がある。Gyana Ratna Thera 氏はパーリの Visuddhimagga 『清浄道論』を中心に Nikāya 及び Abhidhamma を研究対象として、上座仏教の伝統の中に伝授されてきた瞑想体験の実践と、その内容を体系的に整理した(Gyana Ratna Thera [2001] *The Way of Practicing Meditation in Theravada Buddhism*, Tokyo: Sankibo-Busshorin Publishing Co., Ltd.)。さらに「定」samādhi と「慧」paññā または「止」と「観」などの仏教修行論に対する注目すべき研究成果は Cousins 氏(Cousins, Lance S. [1974] “Buddhist Jhāna: Its Nature and Attainment According To The Pāli Sources”, *Religion* 3, pp.115-131. [1984] “Samatha-yāna and Vipassanā-yāna”, *Buddhist studies in Honour of Hammalava Saddhātissa*, Nugegoda: University of Jayewardeneperu, pp.56-68. [1996] “The Origins of Insight Meditation”, *The Buddhist Forum IV*, ed. By Tadeusz Skorupski, New Delhi: Heritage Publishers, pp.35-58)、Griffiths 氏(Griffiths, P. [1981] “Concentration or Insight: The problematic of Theravāda Buddhist Meditation Theory” *The Journal of the American Academy of Religion* 49/4, pp.606-624)、Schmithausen 氏(Schmithausen, L. [1981] “On Some Aspects of Descriptions or Theories of ‘Liberating Insight’ and ‘Enlightenment’ in Early Buddhism”, *Studien zum Jainismus und Buddhismus*, Wiesbaden: Steiner-Verlag-Wiesbaden-GmbH, pp.199-250)、Bronkhorst 氏(Bronkhorst, J. [1986] *The Two Traditions of Meditation in Ancient India*, Stuttgart: Steiner-Verlag-Wiesbaden-GmbH.)、Vetter 氏(Vetter, T. [1988] *The Ideas and Meditative Practices of Early Buddhism*, Leiden: E. J. Brill.) などによりあげられた。

- ② 金宰晟 [2003] 「慧解脱について」『印度学仏教学研究』51-2, 東京: 日本印度学仏教学会, p. 831を参照。
- ③ n’ atthi jhānaṃ apaññassa, paññā n’ atthi ajhāyato. (Dhp. 372)
- ④ AN. vol.II. pp.156-157: なお、小部の Paṭisambhidāmagga 『無碍解道』にも詳細な記述がある(Pṭs.2.1 Yuganandha-kathā: Pṭs. vol.II. pp.92-103)。
- ⑤ 前田恵学氏は、小部(Khuddaka-Nikāya)の最古層を法句経(Dhammapada)・感興偈(Udāna)・如是語(Itivuttaka)・経集(Suttanipāta)・長老偈(Theragāthā)・長老尼偈(Therīgāthā)・ジャータカ(Jātaka)であると述べている(前田恵学 [1977] 「原始聖典」『仏典解題事典』東京: 春秋社, pp.61-62を参照)。
- ⑥ Gyana Ratna Thera [2001] *The Way of Practicing Meditation in Theravada Buddhism*, Tokyo: Sankibo-Busshorin Publishing Co., Ltd., 36-46を参照。
- ⑦ 経と論との中間時代において成立した Paṭisambhidāmagga では、samatha とは「心一境性」(cittassekaggatā: Pṭs. vol. I. pp.97-98; vol.II. p.172, p.176)・「不乱」(avikkhepa: Pṭs. vol. I. p.16, 21, 74, 180; vol.II. p.85, 90, 119, 140, 144, 161)であると定義されている。これに対して vipassanā とは無常・苦・無我を順次に観ずる「随観」(anupassanā: Pṭs. vol. I. p.16, 21, 74, 97-98, 180; vol.II. p.85, 90, 119, 140, 144, 161, 172, 176) などであるという。
- ⑧ 森章司 [1995] 『原始仏教から阿毘達磨への仏教教理の研究』東京: 東京堂出版, p.643を参照。
- ⑨ 「止」や音写語「奢摩他」と訳される。

- ⑩ 「減諍・止諍」と訳される (DN. vol. III. p.254; MN. vol. II. p.247; AN. vol. IV. p.144など)。
- ⑪ 「諸行の寂止」と訳される (DN. vol. II. p.36, 37; MN. vol. I. p.167, 436; SN. vol. I. p.298; vol. V. p.226; AN. vol. I. p.133; vol. II. p.118; vol. III. p.164; vol. IV. p.423, 424, 425, 426; vol. V. p.8, 110, 111, 319, 322, 354, 358など)。
- ⑫ これ以外は D6、D7において説かれている。
- ⑬ 原始仏教における止観の定義について、先行研究を挙げれば、中村元氏は「止」のほうが「禪定」にとって本質的なものであり、「観」はむしろ「智慧」を本質とするものであると説いている (中村元 [1975] 『原始仏教における止観』『止観の研究』東京：岩波書店, p.40)。森章司氏は、「止」は一言でいえば広い意味での禪定の中の定に当たり、戒・定・慧の三学でいえば「定」、即ち「増上心学」に当たり、これに対して「観」は「増上慧学」に相当すると見てよいであろうと論じている (森章司, 前掲論文 (註8) p.644)。
- ⑭ 増上心学については AN. vol. I. p.235, 236において「四禪」を指すので、禪は止の段階に相当するのである。
- ⑮ bhikkhū を bhikkhu に訂正。
- ⑯ これ以外は D6、D7、D18において述べられている。
- ⑰ 経と論との中間時代における Paṭisambhidāmagga の Pts.2.1 Yuganandha-kathā (Pts. vol. II. pp.92-103) では D10の内容と同様であるが、D10より詳細に述べられている。
- ⑱ DN. vol. II. p.312; MN. vol. I. p.61; vol. III. p.251など。
- ⑲ MN. vol. III. pp.71-79
- ⑳ 正定が中心の修行であり、他の七支は正定の補助具とされることについて「大四十経」以外は SN.45.28. Samādhī (SN. vol. V. p.21) 及び AN.7.42. Mahāyañña-vagga (AN. vol. IV. p.40) さらに DN. vol. II. pp.216-217; vol. III. p.252において述べられている。
- ㉑ SN. vol. V. p.196, 199; AN. vol. III. p.12など。
- ㉒ taṃ dhammaṃ paññāya pavicinati pavicarati parivīmaṃsaṃ āpajjati. (MN. vol. III. p.85; SN. vol. V. p.68, 111など)
- ㉓ DN. vol. II. p.312; MN. vol. I. pp.48-55; vol. III. p.251; SN. vol. IV. p.142; vol. V. pp.8-9など。
- ㉔ Thanavuddho, B. [1996b] 「二カーヤにおける八聖道と三学系統の修行道」『印度哲学仏教学研究』4, 東京：東京大学, p.4を参照。
- ㉕ 宇井伯寿 [1926] 「八聖道の原義及びその変遷」『印度哲学研究』3, 東京：甲子社書房, p.14 及び、中村元 [1972] 『原始仏教の生活倫理』東京：春秋社, p.27を参照。
- ㉖ 和辻哲朗 [1970] 『原始仏教の実践哲学』東京：岩波書店, p.259を参照。
- ㉗ 三枝充恵 [1978] 『初期仏教の思想』東京：東洋哲学研究所, p.469を参照。
- ㉘ 四聖諦の三転十二行相の示転・勧転・証転 (Vin. vol. I. p.11; SN. vol. V. p.423)。
- ㉙ Vin. vol. I. p.11; SN. vol. V. p.422
- ㉚ Thanavuddho, B., 前掲書 (註24) p.6を参照。
- ㉛ 正語・正業・正命、つまり三学の戒学に相当するものの修習の目的は、不悔となって容易に定に入れるようにすることであり、そして定の修習により慧・解脱などが得られる。これについては、AN. vol. III. p.20, pp.200-201, p.360; vol. IV. p.99, pp.336-337; vol. V. pp.2-7, pp.312-317; Vin. vol. V. p.162などに見られる。
- ㉜ 八聖道を修習し終えた者が預流者となることについては、SN. vol. V. p.348において述べられている。

- ③③ 十結を捨断して預流者をはじめとする聖者となることについては、MN. vol. I. p.226において述べられている。
- ③④ D10の阿羅漢に得達する四つの支分の「法掉挙によって捕まえられた心が一点になり統一する」ことはD16の「掉挙を捨断するために、止を修習する」ことと比較して、「法掉挙により捕まえられた心が止によって捨断され、一点になり統一する」ことになる。従って、D10の四番目の支分は「止」を指すと考えられる。